



古代の

日本 靈 異 記 論

と 教 仙

古 比 直 櫨 重 八

Naohiko Yaegashi

天 皇

房 書 林 翰

美作の国司と「知識」の結成―下巻第一三話

はじめに

美作国の鉾山で、坑口が崩落するという事故があり、ひとりの男が坑内に閉じ込められてしまった。しかし沙弥に変化した観音が現れて、この男に食物を届けてくれた。やがて男は地底から救出された。『日本靈異記』下巻第一三話は、あらましこのような話である。

救出された男は、かねてより法華經の書写を発願していた。それは知識の結成によって実現した。これが本話に付せられた後日談である。筆者は、この經典を書写するために結成された知識の姿に興味を覚える。古代の諸史料に現れる知識という仏事を推進する集団の問題は、すでに多くの人によって論じられ、その実態が明らかにされている。筆者は、そうした先行研究に多くのことを教えられて来た。しかし、なお再考の余地も残されているのではないかと愚考する。その一例が本話に見える知識である。

一般的に、知識は後世の講中にも比せられる、古代の民間仏教の一形態と理解されている。しかし、本話に見える知識の結成は、美作の国司によって行われたものである。このような国司を中心に結成される、いわば官製の知識を、民間仏教の範疇に含めてよいものであろうか。知識と呼ばれる仏事推進のための集団の中には、民間仏教の範疇には含み得ないものもあつたのではないか。

本章の作成は、そうした疑問から出発した。しかし、知識の結成を語る後日談の考察には、説話の全体への考察が必要と考えられる。従つて、知識の問題を考えるに先立つて、本話自体の抱える厄介な問題の整理が必要となる。本章は、その整理を試みたものである。

一 下巻第一三話の先行研究覚書

本話は、観音が変化して登場し、危機に瀕した者を救済するという場面を含んでおり、観音の靈驗譚と見なすこともできる。その点では『靈異記』の数多い観音靈驗譚のひとつに過ぎないとも言える。しかし、鉾山を舞台とする点では、『靈異記』の中でも極めて異例の説話である。古代の鉾山に関する史料は多いとは言えない。その欠如を補うために、史料としての信憑性には疑問が投げ掛けられながらも、鉾山の実態を考察する際にしばしば使用されている。

史料としての信憑性に疑問が投げ掛けられる理由は、一般的には、説話が事実の正確な記録を旨とするものとは考えられないことにある。本話の場合は、それに加えて、唐の唐臨の編纂した説話集、『冥

報記』の上巻第八話に類似しているという個別的な理由もある。『冥報記』上巻第八話も、穴の中に閉じ込められた男が、僧侶に変化した観音によつて救われたという話である。すでに指摘されたように、また後に改めて確認するように、観音の靈驗譚と見た場合、よく似た話である。もし本話が、その翻案であるとすれば、史料としての信憑性は大幅に低下することになるであろう。本話が一体どの程度、古代の鉾山の実態を反映しているのかという問題が提起される所以である。

露木悟義氏の「日本霊異記下巻第十三話考」⁽¹⁾は、本話と『冥報記』の類話との対比を試みた論稿である。露木氏は、二つの話が似ていることを認めたくえで、しかしたとえ『靈異記』の編者景戒が、『冥報記』の類話を知っていたとしても、本話は、美作の鉾山の実態を反映した説話であると見ており、『冥報記』所収の類話の机上における単純な模倣や翻案とは考えられないとしている。そしてその根拠を、美作の鉾山の描写と美作の国司の登場とに求める。氏の結論は、ほぼ次の指摘に集約されるものようである。

英田郡の鉄鉾山で起きた事件を国司が講中に語ってきかせ、講中は写経寄進のための資金を集めるために、その話を民にきかせてまわったことであろう。そこから話は波及してやがては冥報記の説話との接触も生じたのではなからうか。あるいは、冥報記の説話に対抗する話を本土に求めていた景戒が、冥報記の説話を意識して採集した説話であるとも考えられる。

露木氏は、説話の伝承者や伝承の経路、および景戒の中国の説話集への対抗意識、いわゆる自土意識をも考慮しつつ本話の成立を推定している。その是非についてはなお議論の余地があるように思われ

るが、ここでは氏が、まず事実に基づいた話があつて、後に『冥報記』の影響が加わつたと見ていることに注目しておきたい。寺川真知夫氏の「『日本霊異記』下巻十三縁の形成⁽²⁾」も、『冥報記』との対比を一層徹底して行い、さらに本話の伝承者や伝承の経路についても考察を進めている。寺川氏の推定も、露木氏のそれに大きく相違するものではないように見受けられる。

以上要するに、両氏ともに本話が『冥報記』の単なる翻案ではないと見る点では一致している。その影響については、両氏はこれを否定しないが、しかしそれは、本話の骨格がある程度まで出来上がつてからのことであると見ているようである。けれどもその論拠は、煎じ詰めると、鉾山およびそれをめぐる知識の結成の描写の迫真性には、机上の創作とは言えないところがある、ということに尽きるのではなからうか。両氏ともに、本話の鉾山やそれをめぐる知識の結成の描写を、『冥報記』の影響を二次的なものと測定する基準にしたのであるが、しかし、その基準自体が基準となり得るかという吟味が、十分に行われていないように思われるのである。けれども、これを両氏の失考と言うことはできないであろう。本話が伝える鉾山の姿を、事実の反映と証明してくれる他の資料がないから、やむを得ないことも見えるのである。

本話をめぐる論稿で、見逃すことのできない重要な指摘を行つたのは、益田勝実氏の「経の説話——観音靈驗譚の変貌⁽³⁾」である。益田氏は、本話を、基本的には観音靈驗譚であると見た。しかし、にもかかわらず同時に法華經靈驗譚ともなっているという奇妙な二重構造に着目し、そうした奇妙な構造を持つに至つた経緯、すなわち本話の成立過程を考察した。そして、因果の理法などの、法への信仰を支えたり広めたりする説話群、〈法の説話〉に対して、特定の經典の特定の字句に対応し、經典への信仰を支えたり広めたりする説話群、〈経の説話〉の存在に注目する必要があることを指摘した。すなわち、〈法の説話〉に対する〈経の説話〉という、仏教説話の新しい分類項目の設定を提唱したのであつた。

益田氏によれば、中国の六朝時代に盛んになつた観音信仰には、『法華經』「觀世音菩薩普門品」に拠りどころを持つものの外に、『請觀世音經』などに拠りどころを持つ観音信仰もあつた。益田氏は、本話の原話は、『請觀世音經』系の經典の字句に対応して、観音の救済への確信を促す説話、すなわち〈経の説話〉のひとつとして誕生し流布せしめられたと推定する。

しかし、やがて『請觀世音經』などに基づく観音信仰が衰えると、その許で重要な役割を担つていた〈経の説話〉も、その意味や意義が忘れられて行くこととなつた。それらの中には、『法華經』系の観音靈驗譚に変貌せしめられるものもあつた。本話もそうした変貌を迫られた一例ということになる。すなわち法華經靈驗譚的な要素の挿入である。そうした加工が、いつだれによつてなされたかは分からないが、本話は、まさに〈経の説話〉から〈法の説話〉への羽化直前の段階で『靈異記』に採録されたのであろう。奇妙な二重構造の話として書き留められた理由はここにある、というのである。

益田氏は、本話の成立過程を、海彼の観音信仰の推移と、それに伴つて観音靈驗譚がたどつた運命とを視野に入れて考察したのであつた。益田氏の卓抜な指摘は、説話の成立論に分類されるものと思われるが、その後の中国と日本の説話の比較研究が、これを継承しているようには見えない。氏が展開した成立論のあまりに壮大な広がり、多くの研究者が追跡を控えているということであろうか。

益田氏は、考察の出発点を、海彼の、信仰の基盤を失った観音靈驗譚のその後の運命に据え、そこから本話の二重構造の生じた理由を考えた。それに対して、先の露木、寺川二氏は、本話と『冥報記』の対比から影響の度合いを考察したのである。元来、考察の出発点も方法も異なっているものであり、従って両者の結論を比較することには慎重でなければならない。

しかし、益田氏の推定には、二氏のそれとは異なるところがあるように見える。益田氏も、本話を『冥報記』の翻案ではないと見ている。この点では、二氏よりも徹底しているように思われる。本話の原形を、おそらく唐代に成立した『冥報記』以前の、もしくはそれとは無縁の観音靈驗譚と見たのである。そしてそれがその後、いかなる経路をたどったかは分からないが、美作の鉾山を舞台とする説話に模様替えされ、『靈異記』に採録されたと見ているのである。はじめに事実に基づく話があつて、それが『冥報記』の影響を受けて本話が出来上がった、と見る二氏に対して、はじめに観音靈驗譚があつて、それが美作の鉾山の話に仕立てられた、とするのが益田氏の見方であるように思われる。はじめにあったのは何か。美作の鉾山をめぐる説話か、観音の靈驗譚か。やや強引に相違点を強調しているかも知れないが、露木、寺川二氏と益田氏との間には、この点に違いがあると思われるのである。それにしても、両者の考察は全く噛み合わないものだろうか。改めて検討してみたいと思う。

ところで、本話の原話と想定される観音靈驗譚が、いつどこでだれによつて作られたかについては、益田氏は具体的に言及してはいない。もとよりそれは分からないことなのであるが、しかし、氏の指摘に沿つて考えて行くと、次のようなことにもなつてしまふのではないだろうか。本話の原話、すな

わち〈経の説話〉のひとつである観音靈驗譚は、観音信仰が盛んとなった中国の六朝時代、およびそれ以降であれば、また、中国仏教文化圏に属し、六朝の観音信仰の広まった地域であれば、いつでも作られても不思議はないのではないか。またその〈経の説話〉への変貌も、同じくいつでも行われても不思議はないことになるのではなからうか。氏の示唆に富んだ指摘は貴重である。しかし同時にそれによつて本話の成立論、そしてそれに連動する史実性の問題も、かえつて新たに繰り広げられた闇の中に拡散して行つたとも見えるのである。問題は再び振り出しに戻つた感がある。

以上、本話を専論した三氏の論文について若干の論評を加えたが、本話の研究の現状の紹介になり得たであろうか。以下、三氏の指摘を踏まえて改めて本話を検討してみたい。

二 下巻第一三話

ここでは、『日本靈異記』下巻第一三話の全文を掲げ、私見を述べることにする。なお便宜上、題名をも含めて六段に区切つた。

I 将写法花経建願人断内暗穴頼願力得全命縁 第十三

II 美作国英多郡部内。有官取鉄之山。帝姬阿倍天皇御代。其国司。召発役夫十人。令入鉄山。入穴掘取鉄。時。山穴口。忽然崩塞動。役夫驚恐。從穴競出。九人僅出。一人有後出。彼穴口塞合留。国司上下。思之。所圧而死。故惆悵之。妻子哭愁。凶絵観音像。写経。追贈福力。而還七日

已訖。

III 于時。独居穴裏念。「吾。先日。願奉写法花大乘。而未写斷。我命全給。我必奉果。」居于闇穴。而惆悵之。自生長時。至于今日。無過此哀。彼穴戸隙。指刺許開。日光被至。有一沙弥。自隙入來。鉢盂饌食。以与之語。「汝之妻子。供我飲食。雇吾勸救。汝復哭愁。故我來之。」自隙出去。々後不久。当乎居頂。而穴開通。日光照被及也。穴開通広。方二尺余。高五丈許。

IV 于時。卅余人。取葛入山。自穴刃往。穴底人。見人影叫言。「取我手」云。山人側聞。如蚊音。即聞怪之。取葛繫石。下底而試。底人取引。明知人也。結葛為繩。編葛為籠。以四葛繩。繫籠四角。機立穴門。漸下穴底。々人乘籠。以機牽上。持送親家。親属見之。哀喜無比。

V 国司問云。「汝作何善。」答曰如上。国司。聞之大悲。引率知識。相助造法花經。供養已畢。

VI 是乃。法花經神力。觀音鼻眞。更莫疑之矣。

本話を段落ごとに概観すれば次のとおりである。

I 法華經の書写を發願した者が、その發願の力によって暗い穴の中にあつても命を失わなかつた話。

II 帝姫阿倍天皇（孝謙・称徳天皇）の代に、美作国の官宮の鉄山で、国司の徵発した役夫が鉄の採掘をしていたが、坑道の入口が崩落し、逃げ遅れた一人の役夫が中に閉じ込められてしまった。救出は不可能であり、また生存の見込みはなく、国司らは大いに悲しんだ。役夫の妻子も、その死を悲しみ、觀音の圖像を作り写経して、追善供養を執り行い、その後世を弔った。

III しかし、この役夫は、崩落した坑道の奥に生きていた。そして、救出されたならば、かねて發願した法華經の書写を完成させたいと祈願したり、身の不幸を嘆いたりしていた。そうした男の前に、突然ひとりの沙弥が現れ、食物を与える。また沙弥の去った後、地上に通ずる穴が開いた。IV やがて葛採りに山に入っていた付近の者たちが、穴の底にいる男を發見し、葛で籠や綱を作

り、男を地上に釣り上げ、家族の許に帰してやつた。

V 男を鉢山に徵発した国司は、男の話を聞き非常に感動して、知識を結成して、かねて男が發願していた法華經の書写を完了させてやつた。

VI 法華經の不思議な力や觀音の偉大な力に疑いを抱いてはならない。

本話を奇跡を含んだ話にしているのは、坑内の男の前にひとりの沙弥が出現する場面である。この沙弥が、妻子が追善供養を行うために圖像にしたという觀音の化身であることは疑う余地がない。觀音によって、男は飢えを免れて、救出されるまで生き長らえることができたのである。また、觀音が去った後に、地上に通ずる深い穴が開いたとあるが、それは地割れや陥没によるものなのであろうか。それとも、これも觀音が開けてくれたのであろうか。そのどちらであるかは分からない。ともかく飢えを免れ、深い穴が開いたことによって、男が發見され、救出される条件が揃ったのである。

注意しておきたいのは、男を地上に導いて救出してくれたのが觀音だったのではないということである。觀音の役割は、救出の条件を揃えることであつた。本話が觀音靈驗譚と分類されることに、あえて異議を唱えようとは思わないが、注意せねばならないのは、觀音の役割が、意外なほどに限定さ

れたものであるということである。沙弥の去った後で地上に通ずる穴が開いたとあるが、これも観音のはからいであつたかどうかは分からない。それを除外すると、本話は、観音が食糧確保の途を断たれた者の飢えを救済する話、すなわち観音の食物施与譚とでも言うべきである。もしくはそうした場面を含み持つ話であると言うべきであろう。

生還するためにはさらに、大勢の、しかも葛採りの人々が深い穴のかたわらを通ってくれることが必要であつた。それも観音のはからいであつたとは言えないであろう。男の救出の場面には、前田家本『靈異記』には全く見えないのであるが、真福寺本の方には、「機」という特殊な装置が登場する。「機」は、真福寺本の訓釈に「ワカツリ」と訓ぜられている。地底から重量物を釣り上げるために、葛の綱や箆、そして恐らく丸太を組んだやぐらや滑車などから構成され、大勢の人間が力を出し合つて作業する装置、要するに人力に頼るクレーンのことであろうと推定される。地底の男の発見に続いて、男が地上に釣り上げられるためには、こうした特殊な装置も必要であつた。このように、観音の救済だけで男の奇跡的な生還が完了していいことには、もっと注意が向けられてよからう。

本話の題名には、「将写法花経建願人断内暗穴頼願力得全命縁」とあり、法華経の書写を発願したことが生還の原因であつたという因果関係だけが言われており、観音は全く無視されている。他方、本話の結語には、「是れ乃ち、法花経の神力、観音の鼻肩なり。更に疑ふこと莫かれ」とあつて、法華経の不思議な力と観音の救済の力とが対ぜられている。法華の次に観音が来るという字句の順番にこだわれば、法華経信仰に包摂された観音信仰が勧められているとも理解できるのである。本話や本話の

原話を観音靈験譚と見るならば、編纂者が観音を不当に軽視しているという印象を受けるかも知れない。しかし、説話の内部での観音の役割の限定的であることに着目すると、『靈異記』の編纂者景戒の取り扱いも、それ相応なものであつたとも言えるのではなからうか。

無論、観音が不当に軽視されているという印象にもそれなりの理由はある。その変化身の登場は、本話を靈験譚とするための重要な要素である。しかし、男が穴の中で、無事生還できたならば、かねて発願していた写経を成し遂げたいと誓願したところに始まって、特にその後日談に至ると、観音は忘れられてしまい、完全に法華経靈験譚となってしまう。発見され、救出された後に、この男はこれまでの経緯を国司に語つたとあるから、その中には、穴の中に沙弥が出現したことも含まれてははずである。また、男の話によつて、穴の中に現われた沙弥が、妻子が図像に仕立てた観音の化身であつたという理解も生まれたはずである。そうした話や、妻子の描かせた図像との符合があればこそ、男の奇跡的な生還は、多くのものの感動を呼び起こし、また国司が知識を結成する際の原動力ともなつたであろう。しかしそうした部分は省略されている。冗漫な記述になるのを避けたとも考えられるが、そもそも国司の質問がすでに、「汝、何なる善をか作せる」というものであり、閉じ込められる以前と以後の写経の発願を予め特定しているとも見える。妻子の供養に端を発した観音に係わる話を、あらかじめ遮つているとも見える。このように本話は、観音と法華経という、いわば二人の主役を登場させているが、その登場の仕方はとなると、一方が他方の手柄を横取りして交代してゆくという形なのである。たとえば役割が限定されたものであるにしても、観音が不当に軽視されているとい

う印象にも、それなりの理由があることは確かである。

益田氏は、信仰という享受の基盤を失った『請觀世音經』系の説話の変貌と、これを説明した。つまり、観音靈驗譚を本話の原話と見て、それに法華經靈驗譚的な要素が付加されたとしたのである。

しかし、他の説明はあり得ないであろうか。たとえばここで、益田氏とは逆に、露木、寺川両氏の指摘や、春日和男氏の指摘⁴を応用して、『冥報記』の類話などの観音靈驗譚的な要素の方が後に付加されたのではないかと見て、観音の登場する場面を消去するという操作を本話に加えてみよう。果して話そのものが成り立たないということが起こるであろうか。確かに、食糧確保の途を閉ざされた男の飢えは癒されない。しかしそれ以外に、格別の不都合は見当たらないようである。法華經信仰が奇跡を呼び起こし、地割れもしくは陥没が起こり、やがて海底の男が発見され、大勢の人々の手によって地上に釣り上げられた、という話になる。男が飢えさえこらえてくれれば、観音を登場させなくても話として成り立つのである。観音の靈驗譚が核になって本話が作られたという推定があり得るならば、その逆の可能性も等量にあり得るのである。

もとよりそれだけでは奇跡奇瑞の話として、いかにも興味ある場面に乏しいであろう。そこで役者としての魅力に乏しい經典の不足を補うために、同経にも登場する観音の化身を登場させてみよう。すると、本話が復原されるのである。

観音靈驗譚がはじめにあつて、次にそれが法華經靈驗譚に変容させられた。だから二重構造の奇妙な話が出来上がった、という推定が成立するならば、その逆に、はじめに法華經靈驗譚があつて、それを潤色するために観音靈驗譚が挿入された。そこで一方の主役が他方の主役から手柄を横取りしつつ交代するという奇妙なことが起こってしまった、という推定も可能なのである。いやむしろ順序としては逆であろう。後から挿入された観音の方が、法華經の手柄の分け前に預かったがために、読者に割り切れない印象を与えることとなったと言うべきであろう。信仰が衰退して、享受の基盤を失った観音靈驗譚は、それ自体が「変貌」を余儀なくされたのではなくて、話の興味を増すために他の話に挿入された、つまり「再利用」されたのかも知れないのである。

となると、はじめに何があつたかという議論は、はじめにあつたのがどちらかひとつでなければならぬという前提を外してしまえば、解消してしまうのではなからうか。はじめにあつたのは観音靈驗譚と法華經靈驗譚とであつたと言えは済むことではないか。両者がどこかでだれかによって結び付けられれば、本話は完成するのである。

三 『冥報記』上巻第八話

本話と『冥報記』上巻第八話との本文の精密な対比は、すでに先にあげた露木、寺川二氏の論文で行われている。繰り返しになるが、改めて両者の共通点と相違点とを確認しつつ、さらに考察を進めたい。はじめに内田道夫氏編『校本冥報記』⁵によって、『冥報記』上巻第八話を引用し若干の私見を付しておきたい。なお、便宜的に全体を五段に区切った。「」内は、小字の二行書きであることを示す。

I 東魏末。鄴下人。共入西山。採銀砂。出穴未畢。而穴崩。有一人在後。為石塞門。不得出。而無傷損。其穴崩處。有小穴不合。微見日光。此人自念。終無出理。乃一心念仏。

II 其父聞子已丘。無処求屍。家又貧窶。無以追福。乃持餽飯一鉢。往詣僧寺。請一人齋。衆僧多逐豐厚。莫肯為食。父持鉢飯大哭。有一僧愍之。受請食訖。為呪願。因別去。

III 是日中。其子在穴中。忽於小穴明處。見一沙門。徙穴中入來。持一鉢飯。以授此人。食訖便不復飢。唯端坐正念。

IV 經十余年。齊文皇帝即位。於西山。造涼殿。匠工除此崩石。乃見穴中人尚活。出之与婦。父母驚喜。遂闔門練行。

V 「雍州司馬承業。為臨説云。「是著作郎鄧隆所伝之。」」

I 時代は中国の南北朝時代の北朝のひとつ、東魏（西暦五三四～五五〇）の末ごろに設定されている。東魏の都が置かれた鄴の人々が、西山（固有名詞が普通名詞かは未詳）の穴の中に入って銀砂を採取していた。西山の穴とあるが、それが銀山の坑内と称し得るものであるか否かは、この簡潔な記述からは分からない。またここに登場する銀砂を採取する人々が、坑夫などと称し得る專業の従事者であるか否かも分からない。ともかく穴の口が崩落して、ひとりの男が逃げ遅れて中に閉じ込められてしまったのである。男はけがもなく、日光の差し込む小さな穴も開いていた。しかし、脱出することは不可能であり、この男にできることはと言えば、一心に仏を念ずることしか

かなかったのである。

II 事故の知らせは男の父親に届けられたが、それは男が丘死したというものであった。父親には息子の死体を捜すまでもなく、また男の家はたいそう貧しく、男の後世を弔うこともままならなかった。父親にできることはと言えば、粗末な一鉢の食物を持って寺に行き、ひとりの僧侶だけで行う簡素な供養を依頼することだけであった。しかし、寺の僧侶たちは、豊かな食物をのみ求め、粗末な食物には目もくれず、供養を引き受ける者はだれもいなかった。父親が声を挙げて泣いていると、ひとりの僧侶がこれを哀れんで食物を受け、供養の呪願をしてくれた。供養が終ると、その僧侶はその場を立ち去った。

III 父親が供養をしてもらったその日のうちに、閉じ込められた男のところに一人の僧侶が現れ食物を与えた。記述はないが、この不思議な僧侶は、食物を与えると再び小さな穴から外へ去って行ったのであろう。男が食物を食べると、不思議なことに二度と飢えることはなかった。飢えを免れた男は端座して仏を念じていた。

IV それから十年余りが過ぎて、文皇帝すなわち文宣帝が即位し、東魏に替わって北斉を立てた。

この話の冒頭には東魏の末とあったが、東魏は、西暦五三四年に始まり、五五〇年には北斉がこれに替わるといふ、きわめて短命な王朝であった。したがって、文宣帝の即位までに十年余りが経過したというのは、時間的に少々長すぎる。年代的なつじつま合わせに注意が向けられていないのは、男が飢えを免れた時間の長さを強調したためであったかと推定しておく。さて、文宣

帝が西山に涼殿（暑い季節を過ごすための宮殿か）を造らせることとなり、崩れた石を工匠たちが撤去していると、穴の中の男がなお生存しているのが発見され、家に帰された。男の両親は驚き、一族を挙げて仏教に帰依した。

V ここでは、この話が『冥報記』の編者である唐臨に伝わった経路が明らかにされる。すなわち著作郎鄧隆→雍州司馬承業→唐臨という経路でこの話は『冥報記』に採録されることとなったと言うのである。

以上、簡単に内容を見てみた。『靈異記』と比較すると、いくつかの共通点や相違点が目に付く。以下にそれらを取り上げて考察を加えたい。

四 『冥報記』上巻第八話との共通点

はじめに共通点を見てみたいが、『冥報記』で第一に注目すべきことは、この話には観音の名が一度も出て来ないことであろう。しかし、観音が父親の泣き声に応じて化現したと理解できる限りにおいて、観音靈驗譚と見なしてよからうと考えられる。なお、『靈異記』では、観音は妻子の供養があったから出現したのであるが、それとともに、穴の中の男の声にも応じて現れたとある。観音のことばには、「汝の妻子、我に飲食を供へ、吾を雇ひて勧め救はしむ。汝復哭き愁ふるが故に、我来る」とあった。ともに人間界の救済を求める声に速やかに対応してくれるという、慈悲深い観音の存在を示そうとしていると言える。しかし、いずれが救済の速やかさを強調した話になっているかと言われれば、それは父親の供養を受けた観音が、その日のうちに穴の中の男の前に現れたとする『冥報記』の方ではなからうか。『靈異記』では、観音が男の許へ赴いたのは、真福寺本では「七日」、前田家本では「七日」に及ぶ妻子の供養が終ったからのことであった。

次に、観音の化身が行ったことは何かと見てみると、食物の施与に止まるのであって、穴の中からの救出にまで及んでいない。その点も、『靈異記』とよく似ていると言える。穴の中に閉じ込められた男を観音の化身が救ってやった話として、類似が指摘されて来たが、より厳密に言えば、食糧確保の途を閉ざされた男に食物を施与した話として、よく似ているということなのである。けれどもこの点を比べてみると、『冥報記』の方が、より明瞭な観音の食物施与譚になっていると言えるのではなからうか。こちらでは、男が救出されるまで十余年が経過したことになっている。十年という歳月の異常な長さに、荒唐無稽な話という印象を受けるのであるが、しかし同時に、観音のもたらした食物がいかに特殊なもの、神秘的なものであったかに、読者の注意を向けようとしているとも言えよう。より明瞭に靈驗譚という性格を帯びていると考えられるのである。

以上、両話の共通点として特に目に付くものを挙げてみたが、それらを検討してみると、『冥報記』の方が、観音の救済の速疾性を強調していると思えるのであり、またその食物施与をめぐる靈驗譚として性格も、より明瞭であると思われるのである。先に見たように、『靈異記』の方は観音靈驗譚だけで成り立っているわけではないが、以上の差は、それとはまた別に指摘できることである。

両話の相違点としては、まず閉じ込められた男の家族の姿が挙げられる。『靈異記』の場合は、男の妻子が、生存の見込みがないものと諦めて、追善の供養を営んでいる。『冥報記』の場合は、男の家が貧しく、満足にその供養をしてやれなかったことになっている。父親の差し出す粗末な食物では、寺の僧侶たちがだれも取り合ってくれず、大声で泣いているところへ、恐らくその声を聞きつけた観音が、僧侶に変化して現れたのである。そして食物を受け、供養してやり、速やかにその場を立ち去り、穴の中の男のところへ赴いたというのである。つまり、貧者の一鉢の食物にさえ観音は応じてくれるという、観音の無差別平等な救済が、その速やかさとともに、明瞭に看取できるのである。同じく観音の靈驗譚と見なし得る両話でありながら、こうした貧者の救済、もしくは救済の無差別性、平等性という面は、『靈異記』にはまったく見えないのである。『冥報記』と比較すると、救済の速疾性とともに、その無差別性においても見劣りがする。前節の指摘を繰り返すことになるが、観音の救済力を強調する話としては、『冥報記』の方が、その条件をより多く備えていると見えるのである。

相違点の第二として挙げたいのは、観音の化身の登場の仕方をめぐる相違である。『冥報記』の場合、観音の化身は、まず男の父親の前に出現した。その後、穴の中の男の前に現れた。郭の貧困一家族の前にも姿を現したのである。しかし『靈異記』の場合、それは地底の男の前にしか登場しない。彼の妻子は図像の観音しか知らないものである。つまり穴の外、もしくは地上の人間には、観音はまったく無縁なのである。観音はその役割が限定的であるとともに、その登場する場所も限定されている。坑夫ばかりではなく、観音も穴の中に閉じ込められているのである。穴の外は、いわば法華経を主役とする世界である。そしてそこはまた鉱山を運営する国司の世界である。それと観音とは無縁なのである。観音と法華経の二人の主役は完全に活躍の場を違えている。それはまた観音と国司の間に出会いがなく、後者は法華経とのみ係わりを持つということでもある。

こうした主役の住み分けがなぜ起ったか。『靈異記』の方が、観音の救済を強調する話として、より迫力に欠けるのはなぜかという問題も含めて推定すれば、次のようなことであろう。この問題は、おそらく本話の成り立ちと係わるのであろう。成り立ち、つまり異質な二つの話の結合である。二話を結合する際に全体の調整が不十分であつたために住み分けが起つた可能性がある。しかしそうしたいわば不注意に起因すると考えられる一方で、結合の際に、故意に観音の救済の諸特質のそぎ落しが行われた結果だったとも考えられる。観音靈驗譚を挿入する際に、観音を際立たせないような操作が加えられたのではなかったか。その結果、救済者として迫力に欠けるとともに、地上の世界とは無縁な観音が登場することになったのではなからうか、と推定しておく。

相違点として最後に挙げたいのは、話の舞台である。『靈異記』では、美作国の鉄を採掘する官営の鉱山と設定されていた。そして国司の徴発した役夫が登場する。この男を発見し、その救出に当たったのもおそらく鉱山の労役に従事する者であろうし、その際に使用した「機」という装置も鉱山で用いられたものであろう。また、男の写経の発願を助ける知識の結成もここで行われた。舞台は終始美

作の官宮の鉦山である。従ってこれを「美作の鉦山説話」と名付けることもできるであろう。これに對して『冥報記』の場合は、鄴の近郊の西山の銀砂を採取する穴が無台である。一方は明瞭に鉦山を舞台とするが、もう一方は、はたしてそれを鉦山と称してよいかが不明であり、また男がその專業の従事者であったかどうか不明である。さらに北齊の文宣帝が即位して、西山に涼殿を建てようとしたとあるから、たとえそれが鉦山であったとしても、やがて銀砂の採取は行われなくなり、男が救出された時にはすでに廃鉦となっていたと考えなければならぬであろう。金屬の原料の採掘中に穴に閉じ込められた話としては共通するが、設定された舞台としては、一方が、多くの人員を駆使したり、巨大な装置を備えた鉦山が想定されるのに對して、他方の舞台にはそうした印象は希薄であり、「鉦山説話」と名付けることはためらわれるのである。

こうした舞台の相違は、特に後日談の相違と合わせ考えると極めて重要であると思われる。『冥報記』の場合、男の奇跡的な生還は、その一族の奉仏を促したとある。そしてその奉仏は、おそらく一族の間で継承されるものであつて、鉦山を舞台として継承されるものではなからう。他方、『靈異記』の場合、それは国司以下の知識の結成を促している。そしてその奉仏は、もし継承されるものであれば、鉦山を舞台とするであらう。つまり『冥報記』の方は、鄴のある一族の奉仏の発端を語る話、すなわち民間の奉仏の縁起譚と見ることができる。これに對して『靈異記』の方は、地方の官宮鉦山を舞台とした地方行政主導の奉仏の発端を語る話、いわば官製の奉仏の縁起譚と見ることができるのである。『冥報記』の説話と『靈異記』の説話とを決定的に異ならせているのは、この官製の知識の結成に係わる部分なのである。

しかし後日談の相違は、そこに至って初めて生じたとは見えない。『靈異記』の場合は、国司は説話の冒頭から登場しており、男が閉じ込められたと知り嘆き悲しんだとある。そしてこの国司は、生還した男の話にいたく心を動かされ、知識を結成して写経を実現させたというのである。従つて、そうした官製の奉仏の縁起譚という性格は、後日談に至って初めて付加されたのではなく、説話の始まりから予定されたことであつたとも考えられるのである。言い換えれば、本話は鉦山における知識の結成の因縁を語る話として、最初から構想されていたのではないかと思われるのである。

以上、本章では、露木、寺川そして益田の三氏の論稿に触発されて、改めて『靈異記』下巻第一三話を再検討し、また『冥報記』の類話との対比を試みつつ私見を述べてみた。はたして諸氏の考察の整理となり得たであろうか。なお肝心の国司の主導により結成されたという知識の考察は今後の課題として残される。

注(1) 上代文学研究会会報一七号、一九六七年六月、上代文学研究會刊、所収。

(2) 花園大学国文学論究一一号、一九八三年一〇月、花園大学国文学會刊、所収。

(3) 日本文学一九卷七号、一九七〇年七月、日本文学協會編、未来社刊、所収。

(4) 春日和男氏「説話の系譜」(遠藤嘉基・春日和男両氏校注『日本靈異記』「解説」、日本古典文学大系七〇、一九六七年三月、岩波書店刊、三五頁)を参照。

(5) 一九五五年二月、東北大学文学部支那学研究室刊。